

実践報告

コロナ禍における小児看護学実習の成果と課題

岩佐 有子*

I. はじめに

2020年はオリンピックイヤーで華やかに幕開けをした。しかし、世界的にCOVID-19が蔓延し、1月末にはWHOが緊急事態宣言を発表した。それを受け日本政府も「指定感染症」とする閣議決定を可決させ、同時に「検疫感染症」に指定するための政令も決定された。日本国内での感染が蔓延していく中で、国内でも緊急事態宣言が発令され、教育現場も文部科学省からの通達に則り、対面による講義はオンライン講義に移行した。臨地実習も「実習施設等の代替が困難な場合、実情を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得することとして差し支えない」という通達のもと、Webリモート（以下、リモート学習）と学内実習を併用した実習へ変更せざるを得なかった。臨地実習方法の変更に伴い、実習内容と目標の見直し、大学内での実習日程の調整等、できるだけ臨地実習に近づける内容で検討が必要であった。以下に2020年度の小児看護学実習の実践報告を述べる。

II. 2020年度小児看護学実習の目的

成長・発達を続ける子どもとその家族を理解し、各健康段階に応じた看護を実践するための基礎的な能力を養う。

III. 実習目標（小児①、臨地実習、小児②）

- 1) 患児の発達段階および家族の状況から、健康障害や入院が及ぼす影響を理解し、その援助方法を学ぶ。
- 2) 患児の成長・発達に応じた日常生活の援助が理解できる。
- 3) 患児の特徴、健康障害を理解し、看護過程を用いて看護を実践できる。
- 4) 対象に応じた小児看護の基本技術および診療に必要な援助技術を実施することができる。
- 5) 子どもの成長発達の特徴について理解し、成長発達に応じた日常生活や子どもを守り育てる環境を述べることができる。
- 6) 子どもの成長・発達を促し、子どもの権利を守るために必要な配慮について学び、最善の援助を目指す看護者としての役割を考えることができる。
- 7) 小児看護学実習を通して小児看護のあり方を考えることができる。

IV. 対象学生人数・実習期間

3回生 84名

2020年7月20日～2021年2月4日

V. 実践方法・内容

小児看護学実習の10日間の実習を前期と後期の2つの実習スケジュールに分散した。前期に7日間の実習スケジュールを設定（小児①）し、

*京都看護大学

後期には3日間の実習を設定した。前期のスケジュールを7日間に設定した理由としては、看護過程の展開が目的だったからである。例年の臨地実習では、1人の患児を受け持ち、アセスメント・全体関連図作成・計画立案・援助の実施・評価修正を行うことで、患児を取り巻く社会背景、成長発達、病態を総合的に把握し看護を展開し理解を深めていく。しかし、今年度は実際の患児を受け持つことが不可能であったため、ペーパーペイシエントを展開する中で患児の社会背景・成長発達、病態、看護を総合的に考えられる思考過程を個別指導によって育成することに重点を置いた。

後期実習の3日間は、コロナ禍の社会情勢が落ち着き臨地実習へ行くことも踏まえ、2つのパターンで実習スケジュールを検討した。1つは3

日間の臨地実習、2つめはリモート学習と学内実習併用型（小児②）のパターンである。

1. 前期実習7日間の実践内容と工夫（小児①）

対象学生は84名であった。1クール15名～20名であり、全5クールである。全体のスケジュールは資料1の通りである。

1) DVD 視聴

実習1日目では、健康な小児の日常生活と小児が健康障害を思い入院する環境、疾患を理解するための特殊検査に関するDVD視聴をすることで視覚的にイメージ化できるよう工夫した。

健康な小児の日常生活を理解するためには、保育所での過ごし方が中心のDVD教材を使用した。各年齢の運動機能・認知機能・遊び方の違

資料1 前期実習スケジュール（小児①）

1 週目	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
実習内容	オリエンテーション ビデオやDVD 事例紹介 情報整理 アセスメント	アセスメント 関連図 看護計画（手順書作成） 個別指導 事例 経時情報	アセスメント個別 指導 関連図 看護計画（手順書作成）	アセスメント 関連図・看護計画 （手順書作成） 個別指導 手順書作成（バイタルサイン測定方法）	アセスメント 関連図 看護計画（手順書作成）個別指導 eテキスト視聴し、 カンファレンス （バイタルサイン測定方法）
2 週目	月曜日	火曜日			
実習内容	症例カンファレンス 記録物整理	レポート作成 個別面談 記録提出（17:00まで）			



プレイルームの説明場面



サークルベッドの説明場面

いなど、発達段階の違いを理解し、既存の知識と視覚的な情報を統合させ小児を理解することを目的とした。また、健康障害を思い入院する環境の理解として使用したDVDは、事前に実習施設の小児科病棟に、病棟オリエンテーションの様子を撮影させていただけるよう協力依頼し準備をした。病棟スタッフの方に実際のオリエンテーションを実施していただく事で、小児科病棟の雰囲気、様子、物品等、成人病棟との違いを視覚的に理解し、小児が入院する環境をイメージしやすくするための工夫である。

2) 受け持ち事例（ペーパーペイシェント）

用意した事例は、1クール4事例の疾患、患児年齢はそれぞれの時期（乳児期、幼児期前期、幼児期後期、学童期、思春期）で、疾患により急性期であったり、回復期であったりと小児疾

患特有の疾患を幅広く選出した。1クール、1疾患につき4～5名の学生が受け持つ形であり、各クール同疾患はできるだけ選出せず、必ず4疾患のうち2疾患は新たな疾患を選出するようにした。

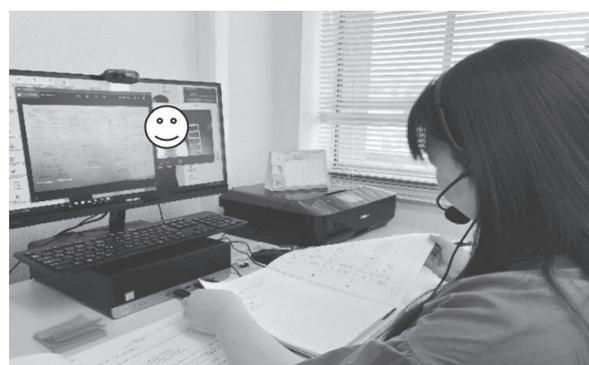
実習初日に受け持ち患児を決定し基本的な情報提供をした後、翌日にはさらに経時的な情報提供を行った。ペーパーペイシェントではあるが実際の患児を受け持っている時のように、患児・家族の経過・変化に対応した看護を考えられるよう状況設定を行った（資料2）。

3) 個別指導

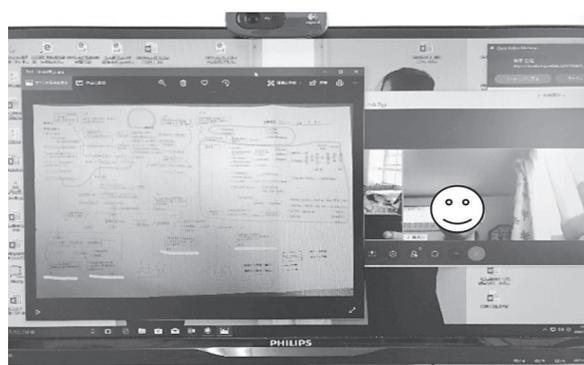
学生1人1人個別にリモートで繋がる時間を毎日確保し、進捗状況の確認、行き詰まりや悩み・困難感に対しての対応を実施した。また、アセスメント、関連図、計画立案に至っては、

資料2 事例の疾患と年齢

年齢	疾患名	年齢	疾患名
8歳3ヶ月 7歳5ヶ月	悪性リンパ腫	4ヶ月	細菌性髄膜炎
2歳10ヶ月 4歳2ヶ月	溶血性貧血	4歳8ヶ月 11ヶ月	川崎病
4歳0ヶ月 10ヶ月	肺炎	4歳4ヶ月 7歳2ヶ月	ネフローゼ症候群
2歳11ヶ月 5ヶ月	ファロー四徴症	10歳5ヶ月 14歳0ヶ月	I型糖尿病
10歳0ヶ月	白血病（ALL）	5歳5ヶ月	特発性血小板減少性紫斑病
5歳0ヶ月	アトピー性皮膚炎		



リモート学習指導の実際①



リモート学習指導の実際②

作成したものをリモートで画面共有をすることで、細かい箇所まで指導することができた。

4) 手順書作成 (バイタルサイン測定)、カンファレンス

小児看護学実習で学生が必ず実施する処置として、バイタルサイン測定がある。小児の場合、成人に対する測定とは違い、かなり工夫や配慮をしなければ測定できないということがしばしばあり、例年学生が苦勞する処置の1つである。実際の患児に実施することはできないが、受け持った事例の患児の年齢・発達段階・個別性を踏まえ、必要な工夫や配慮を考えることは可能であるため、各々にバイタルサイン測定の手順書を作成させた。

実習5日目、作成した手順書を基に、eテキストで一般的な小児のバイタルサイン測定の実際動画を視聴した後、受け持ち疾患ごとにカンファレンスを実施し理解を深めた。

5) 症例カンファレンス

A・Bと大きく2つのグループに分け、カンファレンスを実施。A・Bグループには、それぞれ4つの疾患事例を受け持った学生が入るようにした。自分が受け持った疾患事例だけではなく、他の事例も共有することで学びに繋げるためである。

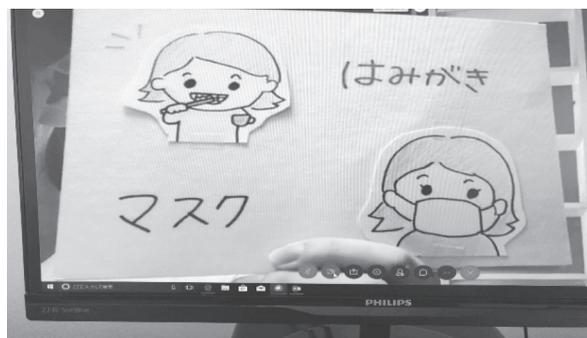
また、発表は受け持ち事例の概要だけではなく、看護計画で立案した患児や家族に必要なプレパレーションや指導・教育の実際を、カメラに向かって実践してもらった。例年の実習でも、1/3～1/2の学生が患児や家族に実施している事である。今年度は、実際の患児や家族には実施できない状況であるが、カメラの向こうに患児や家族がいることを想定して実施してもらった。パンフレットや絵本・紙芝居・人形等を作成する際に必要な材料は、学生の家にある物品を使用してもらった。



カンファレンス場面①



カンファレンス場面②



プレパレーションの実際①



プレパレーションの実際②

2. 後期実習3日間の実践内容と工夫

1) 臨地実習(資料3)

臨地実習に行く事ができた学生は、26人(全体の約30%)である。臨地実習は、2日間の臨地と学内実習1日の日程で進めた。臨地実習の日数が少ないため、患児を受け持つことはできていないが、病棟指導者の実施する処置や日常生活援助、患児や家族との関わり方の実際を見学

すること、また、プレイルームなど児が遊んでいる場面で一緒に関わらせてもらうことで、小児①で創造やイメージするしかなかった場面を実際に経験し学ぶことを目的とし、病棟指導者と綿密に打ち合わせを実施した。

2) 学内実習(小児②)(資料4)

小児②のスケジュールは、学内+リモート学

資料3 臨地実習スケジュール

	1日目(火曜日)	2日目(水曜日)	最終日(木曜日)
実習場所	病棟	病棟	学内
実習内容	1) 見学・項目実習 バイタルサイン測定、処置・検査、日常生活援助、看護ケア、ディストラクション、プレパレーション等 2) 患児・家族とコミュニケーション プレイルームで遊んでいる場面等 (受け持ちはしないが、関われる場面があれば関わりをさせていただく) 3) カンファレンス 1日を通しての振り返り (時間は病棟指導者と調整)	1) 見学・項目実習 バイタルサイン測定、処置・検査、日常生活援助、看護ケア、ディストラクション、プレパレーション等 2) 患児・家族とコミュニケーション プレイルームで遊んでいる場面等 (受け持ちはしないが、関われる場面があれば関わりをさせていただく) 3) カンファレンス 1日を通しての振り返り (時間は病棟指導者と調整)	1) カンファレンス 2日間の病棟実習を振り返っての話し合い 2) 病棟師長の講話 ビデオ放映 ・小児看護の役割と小児看護に求められるもの。 ・小児看護における倫理的配慮 ・発達段階を意識した関わり方 3) 個別面談 4) レポート提出 健康な子どもの発達段階や日常生活を踏まえたうえで、疾病により日常生活の変化が子どもに与える影響について、病棟実習・師長講話・カンファレンス等の学びから、小児看護についてのレポートを作成

資料4 後期実習スケジュール(小児②)

	1日目(火曜日)	2日目(水曜日)	最終日(木曜日)
実習場所	学内	学内	学内
実習内容	1) オリエンテーション DVD視聴(小児看護学実習の実際) 2) 病棟師長の講話 ビデオ放映 ・小児看護の役割と小児看護に求められるもの ・小児看護における倫理的配慮 ・発達段階を意識した関わり方 3) 行動計画表作成 2日目のフィールドワークに向け詳細な行動計画表を作成(所定用紙あり) 4) タッチケアについて	1) フィールドワーク 9:00と15:00には集合(オンラインにて) 自宅の近所、生活圏内、短時間 2) 1日を通しての振り返り (簡単に報告)	1) 報告会 昨日のフィールドワークについてパワーポイントを用いて報告・質疑応答 (発表10分、質疑応答3分) 2) 個別面談 3) レポート提出 健康な子どもの発達段階や日常生活を踏まえたうえで、疾病により日常生活の変化が子どもに与える影響について、病棟実習・師長講話・カンファレンス等の学びから、小児看護についてのレポートを作成

習併用で実施した。後期小児看護学の臨地実習へ行けなかった学生が対象の実習である。全7クールで58人(約69%)であった。

① DVD 視聴

臨地実習に行く事ができなかった学生達が対象のため、小児科病棟での実習がどのようなものか、患児とはどのような関わり方をしたら良いのかなど、小児看護学実習の実際を他大学の学生が実習しているDVDを視聴することで、視覚的に理解しやすい工夫を実施。また、実習施設の小児科師長に講和を依頼し、事前にビデオ撮影をさせていただき、講和を視聴することでより小児看護の理解に繋がるようにした。講和の内容としては、小児看護の役割と求められるもの、倫理的配慮について、発達段階を意識した関わり方についてである。本来であれば、臨地実習で経験をしながら既存の知識と経験値を統合させ、自分で学ぶべき内容であるが、今年

度は経験することが難しい状況であったため、実習施設に協力をさせていただき、病棟師長の声で実際に伝えていただいた。

② フィールドワーク

リモート実習では、自宅近辺で子どもに関係する物や施設等を、健康な子どもの発達段階を意識した視点でフィールドワークを実施してもらった。各々が自宅から徒歩圏内または自転車移動で行ける所を調べ、行動計画を立案し実施した。場所としては、公園、図書館、ショッピングセンター、防災センターなどがあつた。調査内容としては、遊具、環境、絵本の種類・配架、食品、衣料品、玩具等についてである。各自で調査したことはパワーポイントを作成し、学内実習日に報告会を実施した。発表後は質疑応答を実施し、学びの共有と新たな発見・視点に繋げることができた。

③ タッチケアの実施



発表会場面①



発表会場面②



タッチケア場面①



タッチケア場面②

タッチケアの意義や効果の説明、また子どもにタッチケアを実施することのメリットや難しさなどの理解を深めるために実技演習を実施した。最初は、DVDの手技や音楽に合わせ、新生児人形に各々が実施してもらった。手技が少し慣れた後は、学生同士がペアになりオルゴールの曲に合わせ、実施する人・される人をそれぞれ経験してもらった。

Ⅵ. 学生の反応

1. 前期実習7日間（小児①）

良かったと思う所	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に病棟へは行けていないが、小児科病棟の雰囲気や入院環境を映像で見ることで理解が深まった。 ・個別指導をしてもらえることで、発達段階や関連図について理解が深まった。 ・個別指導で助言をもらうことで、多角的な視点で成長発達に応じた日常生活の援助を考えることができた。 ・教員と1対1で指導を受けられるので質問がしやすい。 ・個別指導でアセスメントを深めることができ、患児をとりまく環境の変化や、問題も関連付けて考えることができた。 ・自宅での学習なので、資料や教科書をすぐに確認することができ、自分のペースで学習を進めていくことができた。 ・必要なプレパレーションを考え、カメラ越しに実践できて良かった。また、他の学生の発表もみる事もでき、勉強になった。
悪かったと思う所	<ul style="list-style-type: none"> ・個人作業なので自分ができているのかわからず不安。 ・実際に関わることができないので、情報だけではイメージが難しい。 ・患児や家族の反応が見られないので難しい。 ・病棟スタッフの関わり方や声かけなどを実際に見ることができない。 ・聞きたい事があってもすぐに質問することができない。 ・Wi-Fi環境が悪いと繋がるのが難しい。

2. 後期実習3日間

1) 臨地実習

良かったと思う所	<ul style="list-style-type: none"> ・病棟スタッフの患児や家族とのコミュニケーションのとり方や関わり方を実際にみることで勉強になった。 ・関わり方を実際に見ることで、コミュニケーションのとり方の難しさが良くわかった。 ・実際にディストラクションを実施している場面を見ることで、方法を知ることができた。 ・泣く、嫌がるという反応が見られた。一緒に遊ぶことができた。
悪かったと思う所	<ul style="list-style-type: none"> ・受け持ちをしたかった。 ・実際の患児にプレパレーションを実施してみたかった。 ・家族とコミュニケーションをとって関わってみたかった。

Ⅶ. 成果と課題

1. 目標達成と成果

58人（約69%）の学生が臨地実習へ行くことができなかった現状ではあるが、Ⅳ. 学生の反応の良かったと思う所の項目で挙げられている「個別指導で助言をもらうことで、多角的な視点で成長発達に応じた日常生活の援助を考えることができた。」や「個別指導をしてもらえることで、発達段階や関連図について理解が深まった。」「個別指導でアセスメントを深めることができ、患児をとりまく環境の変化や、問題も関連付け

て考えることができた。」の発言から、実習目標

2) 学内実習 (小児②)

<p>良かった と思う所</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークで、今まで気にかけていなかった物を改めて着目して調べることで新たな発見に繋がり、子どもの発達段階との関連性も理解できた。 ・子どもを育てる環境や安全面に対して気づくことができた。 ・普段他人から触れられることがないため最初は抵抗があったが、タッチケアを実践してみて、触れられるとこんなに温かいんだということがわかった。 ・タッチケアは幅広い年齢に実践できるので家族に実践してみたい。 ・臨地実習へは行く事ができなかったが、小児看護学実習の実際のDVDを見ることで、他大学の学生が実習している場面を見ることで、実習をイメージすることができた。 ・師長さんの講和の中で、子どもの権利を守る配慮や関わり方、役割について話されているのがとても印象に残っていて、考えさせられた。
<p>悪かった と思う所</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨地実習へ行きたかった。 ・実際に患児と関わってみたかった。

2)、3) は達成できていると考えられる。また、「実際に病棟へはいけていないが、小児科病棟の雰囲気や入院環境を映像で見ることによって理解が深まった。」という発言からは、実習目標の1) が達成でき、「必要なプレパレーションを考え、カメラ越しに実践できて良かった。また、他の学生の発表もみる事もでき、勉強になった。」からは、実習目標の4) が達成できていると考える。

臨地実習後の反応では、実習目標6) である「子どもの成長・発達を促し、子どもの権利を守るために必要な配慮について学び、最善の援助を目指す看護者としての役割を考えることができる。」が特に反応が多く、学生の達成感が高かった。また、学内実習後の反応でも、臨地実習後の反応が多かった実習目標6) と実習目標5) 「子どもの成長発達の特徴について理解し、成長発達に応じた日常生活や子どもを守り育てる環境を述べることができる。」の達成感が高いということが、学生の発言からわかった。

臨地実習へは約30%の学生しか行くことができなかったが、学生の反応から2020年度の実習目標は、ほぼ達成できていることの把握ができ、オンライン・学内実習でも一定の成果はあったと考えられる。

2. 課題

学内実習では、「患児や家族の反応が見られな

いので難しい。」「病棟スタッフの関わり方や声かけなどを実際に見ることができない。」「臨地実習へ行きたかった。」「実際に患児と関わってみたかった。」という発言が断然多く聞かれた。

臨地実習でも、「受け持ちをしたかった。」「家族とコミュニケーションをとって関わってみたかった。」という発言が多かった。

総合的に考えると、臨地の場へ行き、患児を受け持ち家族とも関わり、看護展開ができる実習がしたいということが、学生のニーズである。これは安酸(1999)が提唱している「経験型実習」であると言える。「経験型学習」とは学生が患児との関わりにおいて、自分で経験したことを振り返り、自分なりに看護の意味づけをしていくことである。知識を深める・疾患を理解するといった思考過程を育てる内容であれば、学内実習でも十分に対応することが可能である。しかし、実際の患児との関わりや反応・観察・病棟スタッフとの関わり方など、自分自身が経験をすることによって学ぶ内容に関しては、口頭説明だけで理解をすることは困難である。

アーネスティン・ウィーデンバックも「学生が学んだ本質的要素を実践的な知識へと移しかえ、それを臨床場面の現実のなかで、目的どおりに応用できるようにするところにある」と述べられているように、臨床教育の目的とは、講義などで学んだことを実際の患者のケアに適用

し応用する能力を身につけることであるといえる。

実習施設の協力を得て実習環境を整えることは大事であるが、臨地の場へ行かずとも臨床教育の目的を達成することができ、学生のニーズを満たすことができる「経験型実習」の内容を検討していくことが、今後の課題であると考えられる。

Ⅷ. おわりに

核家族化・少子化が進み、子どもと関わる機会の少ない学生が多い昨今、小児看護学実習においても、子どもにどのように話しかけたらよいのか、関わったらよいのか、子どもは苦手だからと言って避ける学生が多くなっている。しかし、看護の対象は万人であり、あらゆる年代の個人・家族・集団・地域社会が対象である。苦手とか嫌いという理由で看護を提供できないことは、看護師の質として問われるべきことである。学生には、苦手意識があっても、子どもを1人の人間として尊重し、真摯な姿勢で子どもと向き合う経験をしてもらいたいと考える。

COVID-19の影響で、臨地実習を経験することができない状況は、子どもとの関わりや子どもを理解する機会の1つが失われることに繋がっているといえる。COVID-19が早く終息し、安心して臨地実習が実施できる環境が戻ることに期待したい。

文献

- アーネスティン・ウィーデンバック / 都留伸子 訳. (1972). 臨床実習指導の本質－看護学生援助の技術, 東京: 現代社.
- 日本看護協会. <https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/rinri.html>. (閲覧日: 2021年2月15日)
- 日本経済新聞. <https://www.nikkei.com/theme/?dw=20012202>. (閲覧日: 2021年2月15日)
- 文部科学省ホームページ. https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01. (閲覧日: 2021年2月10日)
- 安酸史子. (1999). 学生とともにつくる臨地実習教育. 看護教育, 40 (1). 814-25.

